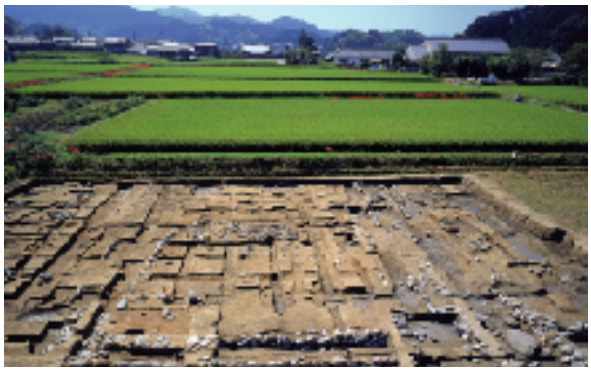
これらの遺構をご覧いただくために、現地説明会を10月6日に開催しました。新聞・テレビで報道されたこともあって、参加者約600人と盛況でした。

調査終了後、現地は水田に戻っています。



石神遺跡の全景と調査区（北から）

奥山廃寺の調査（飛鳥藤原第114-8次）

明日香村にある奥山廃寺の東門改修にともなう事前調査です。東西3.5ｍ×南北２ｍという小さな調査区ですが、南北に並ぶ金堂と塔の中間部分の東側にあたり、これまでの調査成果から、奈良時代に施された瓦敷きの検出が期待されました。

瓦片と礫がつまった、まさに瓦礫というにふさわしい層を掘り下げると、瓦敷きが顔を出しました。意識的に凸面を上に向けて敷いた比較的大きな平瓦や、ばらまいたと思われる小片があり、その中には長さ38cm、幅25cmをはかる鴟尾の破片もあります。奥山廃寺での鴟尾の出土は初めてです。

この瓦敷きの下層には、７世紀前半の瓦で整地した瓦層があり、瓦敷きを施す前に、比較的大規模な伽藍内建物の改作があったことがうかがえます。

わずかな面積の調査でしたが、実りの秋にふさわしい成果をあげることができました。

奥山廃寺の調査区と塔跡に建つ十三重石塔

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

文化財関係研修の実施

発掘技術者研修　「文化財写真課程」

８月21日より９月21日の日程で、文化財写真課程の研修をおこないました。

今回から、平城宮跡発掘調査部に新設された「写真資料調査室」が担当で、本年の参加者は例年よりすこし少な目の10名で、「少数精鋭」の研修でした。

本研修の内容は、文化財調査に必要不可欠な「写真記録」に対する基礎知識や、技術の修得を目的とした研修で、その内容は非常に多岐にわたります。まず、記録材料である写真感材の基礎知識から撮影、そして撮影された写真の保存から、その活用である印刷技術の基礎知識まで及び、１カ月という長期間にもかかわらず、例年やや消化不良の感が否めない研修です。

本年の参加者は少人数が幸いして参加者各自が指導者と十分なコミュニケーションを取ることができ、理解度は高かったと思われます。

前半の座学ではいわゆる「写真専門学校」で教えるような専門知識を講習するため、写真の専門教育を初めて受ける研修生はついていくのに精一杯の様子がありありと見え、理解する段階にはなかなか達しないようです。

後半には実習があり、参加者は撮影から現像・焼き付け、図版割付までを２名ないし３名のグループでおこなっています。図版割付の時、参加者が口々に声を上げます。「縦画面が必要な図版で縦画面の写真がない」「露出不良でコントラストのしっかりした写真がない」「フレーミングが悪くてトリミングができない」「ピントが合ってない～」

上流（撮影）で流した汚水は下流（印刷）で取り除くことはできない。つまり「よい撮影をすることがすべてに優先する」という文化財写真の基本を実感することになります。

講師陣には、我が調査室のスタッフをはじめ、写真業界の第一線で活躍している外部講師や、印刷業界の最前線を行く印刷会社の技術者をそろえております。講師陣すべてが「埋蔵文化財写真は撮影された写真そのものが文化財であり、豊富な情報量とそれを保存する環境がなければ文化財写真とはいえない」という共通の考え方に基づいて講義をおこなっ

ているのもこの研修の特徴です。

技術の習得も大事ですが、そういった考え方を学び取ってもらうことが我々の目的です。

発掘技術者研修 「測量外注管理課程」

この研修は、遺跡測量を外部へ発注する際に、1）適切な仕様書が提示できること、2）成果品が点検できること、のために必要な基礎知識と実務を習得するのが目的です。基礎知識を得るためには、測量の実際を体験することが理解への近道ですので、班に分かれて実習をするわけですが、今年はある班で水準測量の成果が悪かったために、日没後に再測するというようなハプニングもありました。測量の実際は体験すればよい、という程度に考えていましたが、結果があまりにも悪いと、どうしてもやり直したいというのは人情であろうと思われます。

実習風景

実習は二段階に分かれています。一つは、光波測距儀を使って宮内を1 kmにわたってトラバースする基準点測量を想定した作業、もう一つはその路線上のある地点を発掘の現場に見立てて平板測量や細部測量に用いる図根点を増設する作業です。後者の測距にはスチールテープを使います。水準測量は全路線にわたっておこないます。

ここ数年、わが国の測量システムが変わり、世界測地系へ移行することが話題となっています。本研修課程でも毎回それについて紹介してきましたが、2001年6月に法律が国会で承認され2002年4月より実際に施行されるという状況になったので、今回はより切実に受けとめたようです。しかしながら、実際にはどのように対応したらよいか分からないというのも、正直なところです。

将来の測量の方向を示すものとしては、GPSと3Dスキャナーを紹介することが必要と考え、今回はいつものGPSに加えてスキャナーの実技見学を取り入れました。使用した機種は1 mm以下の精度でコンターが描けるという点で目新しく、遺物の測量への応用を考えた研修生は多くいました。

発掘技術者研修「官衙遺跡調査課程」

専門研修「官衙遺跡調査課程」は10月28日から11月2日までの延べ11日間の日程を無事終了しました。国府から郷関係官衙遺跡に及ぶ地方官衙遺跡の発掘調査や研究上の専門的な知識や技術を習得するための研修で、山形県から熊本県までの研修生18名が参加しました。そのほとんどが当該遺跡の調査経験があったり、これから調査にあたろうとする者であり、熱心な反応がみられました。

外部・内部の各講師による講議・実習・現地見学とも大変好評で、これまで見過ごしてきた発掘調査上の留意点や視点を学び、新たな目を開かれたとする感想が多く、この研修の継続を要望する意見も少なくありませんでした。今回も、古代建築構造の講義と春日大社着到殿での実測実習とを組み合わせたカリキュラムは、上部構造との関係を考えながら建物遺構の調査にあたる必要性を体得でき、大変有意義であったとする声が目立ちました。今回は、研修生同士の経験交流や情報収集が時間不足とならないよう、研修生自身による事例報告と意見交換の時間を増やしました。この方法も毎回好評で、研修に対する意欲を高める上で、また研修生相互のネットワークづくりにも効果的であったと思われます。

最近の地方官衙遺跡調査では末端の官衙関連遺跡が大きな問題となってきており、研修生からの質問や悩みもこうした遺跡に関するものが少なくありませんでした。この分野も講義では取り上げているものの、まだ明確な遺跡の性格判断などの方法は確立しておらず、こうした研修生の要望に応えられる基礎的な研究も重要な仕事であることを痛感させられました。

特別講座「遺跡の保存と活用課程II」

この研修は、各地の遺跡整備・活用の事例を取り上げて討議することを通じて、遺跡の整備手法や遺跡の活用法に関する専門的知識と技術を習得するとともに、遺跡整備の理念や遺跡の再生に向けた展望についても探ることを目的にしたものです。11月7日・8日の両日、遺跡整備活用の沿革についての講